

第一話

「三年間ごいっしよさせてもらってありがとうございます。これからいろいろと大変でしょうけど、どうかお元気でいらしてね」

はじめてだ。

もしかすると今日中に『元』夫になってしまう可能性のある男のこんな顔を見るのは。胸がすく。婚約期間もふくめると四年近くの演技もこれでおしまい。ああせいせいした。

「どういふ……ことだ。りんどう、きみは俺に何か不満でも抱えてたつてのか。ならなぜ何も言わない。帰宅するたびに笑顔で出迎えてくれてたじゃないか！ あれは全部偽りだったとでも言うのか」

「だってあなたそういう奥さまがお好きでしょ？」

「は……」

鶴丸国永は金無垢きんむくの目を見ひらいた。

モデルも裸足で逃げだすほどの美貌。細身でありながらも、しなやかなバネのように強靱な肉体を持つ男は、女どころか同性まで惹きつける魅力がある。認めざるをえない事実だ。だとしても——いや、だからこそ。

「どんなときも笑顔であなたを全肯定。あなたのすることに心底楽しみを見いだして、ときお

りおどろいてみせる。人にちよつと自慢できる程度の見てくれと、そこそこの家柄。とっても寛大に夫のお遊びを許してくれる従順な良妻。しかも自分以外には興味を持たない貞淑さまで備えてる……。それがあなたの認識していたわたし。どう？ まちがつてる？」

今度こそ鶴丸国永は沈黙した。

いま彼はこの事態にいたつた原因を探り当てようと、脳みそをフル回転させているだろう。ははは。勝手にしやがれ。もちろん点と点は線でつながっている。それに気づかなかつたのはそつちの落ち度だ鶴丸国永。

りんどうは毎日手入を欠かさなかつた長い長い緑の黒髪を乱雑にかきあげる。鶴丸はそれを目の当たりにして動揺を隠せない。

「残念ながら見てくれと家柄くらいだよ、本当なのは。あとは全部ぜえええんぶうそで演技。女は女優って自分でやってほんとだなんて思った。ま、あんたがあんまり家にいないから完遂できたのかもね」

ぞんざいな口の利きかたをしてみると、国永は座っていたソファの背もたれから身を起こす。薄いくちびるがわなわなふるえた。

「寝室でのことも演技か」

何を訊くかと思えばそこ？

男のさがってやつ？

「演技以外何物でもないね。よく考えて。あんたいったい週何回、わたしとは別の女とベッドで遊んでる？」

「……きみは氣にしておかないと言った。自分のもとに帰ってくるのであればそれでいいと」

「うん。浮氣されることはまったく氣にしておかなかった。でも不特定多数と肉体関係持つてするような男のモノを、たとえゴム越しでも突っ込まれるなんて気持ち悪くてしょうがなかったよ。生理的にきつかった。まあそこは恥じらうフリのな感じでごまかしたけど。胃薬手放せなくて困ったよ」

鶴丸のあどけなさすら残る童顔に、苦いものにじんだ。それすらりんどうには魅惑的に映るから笑えない。

彼は天から何物も授かった。五条に連なる鶴丸家に生まれ、将来は五条の名を継ぐ者にと望まれている。そのせいかな、なんでも持つているがゆえに、すべて自分中心という考えに染まっているように見えた。少なくとも、りんどうには。

傲慢な大輪の華。あでやかに咲き誇って香気をまき散らす。欲を制御する方法をまるで知らない子どものような男。まるで毒花だ。

「わからないかなそういう感覚は。ま、むりか。四年近くあんたのこと見てきたけど、あらためる気もないみたいだし？ あんたの友だちも羨ましがってんでしょ。どんだけ女遊びしても黙って許してくれる、絶滅危惧種の古風な武家の女房みたいだって」

「ああ……自慢だったさ。できることならきみのような女と結婚したいと、仲間内では評判でな」

「ははは。都合がいいことこの上ないもんねそんな女。残念だけど現代でそういう人間は男女ともに存在しないと思う。冷静に考えればわかる話だよ。三年は新婚生活を楽しもうってことにしたでしょ、あれは子どもつくらなくていいから提案したの」

「なっ……」

バッグのなかから用紙を取りだす。テーブルの上に叩くように置いた。これ以上ないほどに鶴丸の表情がゆがむ。離婚届。その字を読み取ったのだろう。証人欄も埋めてある。

「あとはそっちが書き込めばそれで終了。慰謝料とかはまったく必要ない。一応三年はお世話になったから、それで帳消ししてことにする」

「りんどう、きみ、ふざけるのもいい加減にしろよ」

鶴丸は激昂した。

やつぱりそうきたか。胃をさすりながら出入り口にむかつて声をかける。

「江雪さーん。はいってくださーい」

リビングと廊下を隔てる重厚なドアから、氷雪を重ねたような髪色をした男が、ちらりと夫婦を見ながら一礼した。

「失礼しますよ。りんどう、もうよろしいのですか」

「いいですよ。あとお願いしますね」

「だれだ。りんどうとどういう関係だ！」

りんどうは手のひらを突きだして鶴丸を牽制した。間男だと思ってもらつては困る。

「代々うちの父の家の顧問弁護士をしてくださつて、左文字法律事務所の江雪先生。結婚式にも出席してたけどおぼえてない？ これから先生はどうしてわたしがそれを叩きつけたのか、そもそもなんでわたしがあんたと結婚したのかを、懇切丁寧に説明してくださるから。ああそれと……」

さつき離婚届を取り出したクラッチバッグから今度は別のものを取り出した。

ハサミ。なんの変哲もないふつうの工具用。この家の自室にあつたもの。顔の横に垂れる自分の髪をつかみ、刃を入れる。

「待て、よせりんどうッ。なんてことする！」

待たない。

じやきんじやきんと切り落とす。ためらいなんかない。足元にばらばら落ちる。さつきまで自分の一部だったものとは思えないくらい無残だ。

黒く長い髪が好きだというから、従順な妻を演じていたりんどうは、言うがまま伸ばしつづけていた。

愛でられるたびにむなしさが積み重なって、嫌いになつてしまった黒髪。その最後のひと束

を鶴丸にむかって投げつける。彼の白との対比にほの暗い愉悦が生まれた。

「じゃあね鶴丸国永さん。どこかでお会いしてもわたしたち他人だからそこはよろしく頼みます。さようなら」

りんどうは出ていった。

ほとんど音もなくとじられたドアを、魂が抜けたように呆然と見つめる鶴丸に、江雪は憐れむような湿った視線をむける。

「ごあいさつが遅れました。奥方のご実家で顧問弁護士をつとめております左文字江雪と申します。依頼人の希望通り一連のできごとをあなたにお伝えしたいと思うのですが。……後日にあらためますか」

鶴丸は奥歯をかみしめながら、自分の体にぶちまけられた黒髪をひと房、手のひらに載せてじつと見つめる。

「いま話してくれ」

「わかりました。ではご希望があつたということでお話いたしましたしょう」

江雪はシルバーのアタッシユケースから封筒を出すと、その中身を手のなかで扇状に広げて見せた。テーブルの上に髪の毛が散らばって置く場所がなかったからだ。それは数枚の写真だった。

鶴丸は怪訝な目つきでそれを凝視していたが、やがて記憶のなから何か引っぱりあげたら

しい。そんな表情になる。

「おぼえがとおりですか」

「ああ……。昔つきあつてた女性たち、か。こつちのふたりはたぶん高校、こつちは全部大学のときか、社会人になつてからのものもあるかもしれん。見覚えがある。だがどれもそんなに長いことではなかつたはずだ。全部ひつくるめて最長がりんどうなな。それで？ この女性たちがどうかしたのかい左文字弁護士」

江雪はゆつくりと写真を伏せ、封筒のなかにそれらをしまい込む。重たいものを吐きだすように話しはじめた。

「あのなかのおひとり、りんどうさんの親友でして」

「何……？ だれだ？」

「それは申しあげられません。ただ、そのかたは一般家庭のご出身で、現在は心身を崩され遠地療養中とだけお伝えしておきましょう」

「わけがわからんな。つまり何が言いたい」

淡い白銀の髪が氣迫で燃え立ちそうだ。金無垢の瞳は猛禽のようにするどく江雪を威嚇していた。

このぶんではりんどうとの接点は江雪にかぎられる。それが鶴丸には許せないようだ。江雪は推測する。和睦となえかけて、飲み込んだ。

「その女性が病んだ原因はあなたにあり、奥方はその復讐者だということです。ほかの写真のかたがたは健康にすごされておりますが、過去にづらい経験をしておいでの女性ばかりです……。すべてあなたが関わっています」

「りんどうが俺に復讐？ 自分のことでもないのにわざわざ三年以上費やして？ そんなにその親友とやらが大事なのか」

背筋に冷たいものが走るのを感じ、江雪はそれに答えることはせず話を先へ進める。

「こう言つてはなんですが、あなたは誠実な恋愛というのをあまり好みではないようで」

鶴丸は話を反らされたことをとがめず、片頬をゆがめながら笑った。薄ら寒い空気が蔓延している。仕事柄そういう場面に出くわす機会の多い江雪だが今回はことさら堪える。

「俺はどの女性にも欠かさずちゃんと前置きしてる。つきあうのはいいが俺はひとりに絞つたりしない、そこを承知してくれないなら無理だとね。ちなみにりんどうを妻にしたらは、特定の相手はつくつていない。妻帯してることも最初に告げてあるし、何より愛人なんて面倒だからな」

江雪の陰鬱なまなざしが鶴丸を見返した。

「愛人でなかったとしても、相手の女性は奥方から慰謝料請求されてもおかしくないでしょうに。そのあたりのことを考えにはなりませんでしたか」

「俺の妻はそんな小さなことで騒ぎ立てやしない。だから三年もやってこられた。本気でりん

「どうが最長なんだぜ」

「……はあ。奥方がなぜあなたと結婚されたかようやく思い知った気がします……。彼女は少しでもあなたの特別になった上で何もかもひっくり返して別れを突きつけ、喪失を味わわせたかったとおっしゃっていましたよ」

とくべつ、そうしつ。

鶴丸は口のなかだけでつぶやき、やられたと言うようにいきなりひざを打った。

「あれは特別だし喪失なら充分味わったところだ。だからもういいだろう。ははっ、りんどうは俺をおどろかせるのがうまいなあ。うん、これから先もいままで通りうまくやっていたけるさ。あれほどの女はほかにいやしないんだ」

なかば本気で言っていることがうかがえ、江雪はこめかみに指先を当てた。りんどうの貞淑っぷりは、はつきり言って巨大猫をかぶった産物だ。それをどう伝えたらいいものかと、江雪は胸にもやを抱えるような気分ですを左右に振った。

「あなたは……本当に救いがたい……。部屋をごらん下さい。奥方の部屋です。それでだいたいのことがわかるでしょう」

「りんどうの弁護士どのが言うならそうしよう」

すでに鶴丸の心証は地に落ちていく。江雪は距離を取って後ろをついていった。

日当たりのいい一室にためらいもなく踏み入った鶴丸は、妙にがらんとした部屋を一度ぐる

りと見まわす。急に顔色を変え、猛然とウォークインクローゼットへむかつていった。江雪はあとを追わず入り口で彼を待つ。

がたがたと音がした。それから端末を耳に押し当てた鶴丸が引き返してくる。

「つながらない」

「昨日契約を解除されたそうです」

「新しい連絡先は」

「こちらでも事務所にもどりませんと、わかりかねます」

「こりやおどろいた。あれの行動は酔狂じゃないようだな。荷物もごっそりなくなつてやがる」
「あなたは外泊をなさることが多く、準備がしやすかつたと聞いています」

鶴丸は今度こそ天をあおいだ。とがった鋭角の鼻先が、窓から差す日光にぼやけてかすむ。ようやく何かが彼のなかでかみ砕かれたのだろうと、江雪は静かに吐息した。

りんどうは自宅だったマンションから大急ぎでおりてくると、地下の客用駐車スペースへ走った。

ひびくヒールの音がいつもより不規則な気がして舌打ちしたくなる。

人影を見つけたりんどうは片手をあげた。桜色の絢爛な髪を個性的に結わえた女性と、目の覚めるような青色の髪の凛とした少年が歩み寄ってくる。江雪の妹と弟だ。家族ぐるみのつき

あいをしていて、遠慮もへったくれもない仲である。

「お待たせ」

「どうです。うまくいきました？」

「ま、ぼちぼち」

「りんどう早くいこう。あいつが追いかけてくるかもしれない」

「小夜つてばあ、んなわけないない。国永はいま江雪さんと話してるんだから」

「何にせよ、うちのサロンにいったほうがいいのでは？ ひどいですよその頭」

自分の手とハサミが届く範囲で適当に切り落としたので、見るも無惨な状態だ。残った髪が
つややかなのが無惨に拍車をかけている。

「りんどうは思い切りがいいよね。こうと決めたら即実行。そういうとこ嫌いじゃないよ。でも宗三姉さまの言う通り先に髪を整えたほうがいいと思う。それじゃどこにもいけない」

「だよー。じゃ、宗三に切ってもらおうかな。ご予約なしですけど」

「しかたありませんね。傷心のあなたにははいねいなケアが必要でしょう」

「傷心じゃない。すっきりしてるところだつての！」

「はいはい。出発しますからさっさと乗ってください。久しぶりにベリーショートにでもします？」

「いいね、それで頼むわ。宗三と同じ色に染めてもいいーかなー。おそろい！」

「あなたには似合いません」

「やだバツサリい。はっはっは」

「やめてくださいよ。あなたがその笑いかたをすると、すこぶる面倒な人を思い出す」

三人で宗三のセダンに乗り込む。りんどうと小夜は後部座席に並んだ。

見慣れたこの界限もしばらくはさよならだ。

なんとなく流れる車窓をながめていると、ふいに袖を引かれた。小夜がこちらを見あげている。りんどうはそつと彼を見つめ返そうとして視界がゆがんでいるのに気づいた。

「ねえほんとはよかつたのりんどう。こんなの復讐でもなんでもないじゃない」

「小夜。おやめなさい」

「やめないよ姉さま。だつてりんどうが泣いてる」

はつとしてバックミラーを見あげる宗三と視線が合い、りんどうはとつさに顔をそむけた。まつ赤になった目もとがすべての答えだ。

「はあ。あなた素直じゃないにもほどがありますよ」

「うるさい宗三」

「かわいくない子ですなあ」

「かわいい成分は小夜で足りてるからいーんですう」

「りんどう。僕はかわいいとか言われてもうれしくない」

「え、ああごめん！ そうだよねもう小夜はもう小学生だもんね！」

「来年中学だから……」

「だよね！ 時がたつのは早いなあ。はっはっは」

わいわいしているうちに涙も引つ込み、首都高を抜けて目的地である宗三のヘアサロンへ到着する。ビルの一階と二階が本店で、二階の一角に宗三専用のVIPルームがある。りんどうはここができた当時からVIPルームにしか通されたことがない。

まっすぐ上階へあがる。

「今日はだれもいないと思いますから適当にかけて待っていてください。下で少々仕事をさせてきます。冷蔵庫適当につかっているからですから」

「はあゝい。小夜なんか飲もつか」

「ソーダ」

「へいソーダ一丁注文はいましたアゝ」

左文字の長姉と末弟はそろってうるんな目でりんどうを見た。

「猫……でしたね」

「巨大だったね姉さま」

「三年以上もよくかぶっていられたのですよ。図々しさには敬服します」

「よいぞよいぞ。大女優とお呼び」

「だが断る」

左文字姉弟のこの結束力。

りんどうは三十分くらいは飲みものを飲んだり、雑誌を読んだり、ソファに寝っ転がってだらすすごしていた。小夜はまっすぐに座ったまま少しうとうとしている。

「遅いねー」

「僕見てこようか？」

「いや。こつちも予約なしでいきなり髪切れ染めろ言っちゃったから待つよ。もう今日は予定ないしさ。小夜は寝てな。かけるもん持つてこようか」

「いらない。……りんどう何かくるよ」

「へ？ あっ」

たしかにドアを隔てた場所で人が言い争っているのがりんどうにも聞こえた。

武道をたしなむ小夜が両目をぎらりと底光らせ、寝転がるりんどうの前にすばやく陣取る。

「警備呼んだほうがよくない？」

「もし必要なら宗三姉さまかスタッフがとつくに呼んでる」

それもそうかと、りんどうは聡明な小夜のことばにうなづく。

「りんどう。片方は宗三姉さまの声だ」

「ん!？」

「いやな予感がする。そっちのクロークに隠れて。早く!」

「っ、小夜残していけないから。隠れるなら小夜も!」

「わかった」

クロークにすべり込むのとほぼ同時に部屋のドアがひらかれたのがわかった。しゃがみ、たがいの手を握り合う。

つぎの瞬間りんどうは全身をこわばらせた。

「飲みかけのグラス……まだ冷たいな。逃げたにしてはすれちがわなかった」

国永、とこぼしたりんどうの口を小夜の手がふさいだ。

耳慣れた低音。感情が高ぶるとそれがうなるように変化することを思い出し、りんどうは身の芯をふるわせた。

今度はここの所有者である宗三の声が聞こえる。

「いい加減にならさないと不法侵入で訴えますよ。いいんですか五条に泥を塗ることになって
も」

「夫が妻を迎えにきただけだぜ。そっちこそ俺から略取で訴えられないよう気をつけるんだな」
「私たちには二十年以上の長いつきあいがあるんです。ぽつと出のあなたにどうこう言われる筋合いはありません。何より離婚なさるんでしょう? そうしたら他人もいいところだ」

「あいにくと離婚する気はない」

「あなたはそうでしょうとも。猫かぶりのりんどうは理想の妻でしたでしょうからね。彼女は解き放たれてうれしそうでしたよ。ご覧に入れられず残念なことだ」

「……この部屋にいるんだろう。出してもらう」

「仮に彼女がいるとしても家捜しをする権限はあなたにありません。本気で通報されたいんですか。あつ、ちよつとお待ちなさい！」

どうやら鶴丸は宗三の言うことを無視したようで、部屋の奥へ進んでくる気配がした。ほんのわずかな時間で目星をつけたらしく、彼はクロークの扉を無造作にあげた。

金無垢の目と視線が衝突する。

思わず体がこわばった。

「りんどう！」

しかし伸びてきた鶴丸の手を、それよりずっと小さな手が思い切りはね除けた。それによって接触は防がれる。小夜がりんどうを守ったのだ。

「りんどうにさわるな節操なし」

「だれだ坊主」

ふつうの子どもならずくみあがるような真正面からの威嚇。だが幼いころから大人に囲まれ武道でしごかれた小夜には通じない。

「僕がだれだかなんてどうでもいい。あなたがりんどうにとつて、これからどうでもよくなるみたいにね」

「この餓鬼、言わせておけば……!」

小夜をりんどうから引き離そうと上体をかがめた鶴丸に、ついにりんどうはブチ切れた。

「餓鬼はテメエだつ。ざけんなこのクソツル」

「り……りんどう!? きみはなんて口をきくんだ。やめろ、頼むから大和撫子にもどつてくれ!」

さんばら髪を怒気に揺らして立ちあがつたりんどうは、脇を締め右拳を握り込む。

「クソツルにはこれでじゅ——ぶん! これからは幻想抱えて好きなだけ遊べばいい。あのマシオンに何人でも囲つて、股間が乾くひまもないくらいになア!」

絶望と焦燥ととまどいが全部入り混じった感情を顔に浮かべた鶴丸は、りんどうが握り込んだ拳に注目していなかった。

「喰らえ積年の恨み。ツルマルバスターツ!!」

「がっ。くはっ……」

体重を乗せた重い一打が、無防備な鶴丸のみぞおちにヒットした。

くずおれる白い麗人を見おろして、りんどうはふるえる呼気を鎮めようと肩で息をする。

「宗三。髪切つて。小夜みたいな色にして。小夜と結婚させて」

「はあ。小夜との結婚は認めませんが、髪については請け負いましょう。あなた寒色系が似合いますしね。で、これはどうするんです？」

「放つとけがいい。幻滅しただろうし勝手にいなくなるでしょ。自分を柵にあげて女には理想を求めるなんてマジろくでもねえ」

しかし鶴丸は、小夜と宗三監視のもと、りんどうがスタイリングを終えるまでその場においてずっと妻を見つめていたのだった。

まっくら駅『7』

きみが眠る前に、玄関先や廊下、それからキッチンに小さなあかりを点けてほしい。できるだけ。忘れなければいいから。

俺がりんどうにそんな頼みごとをしたのは、たしか籍を入れてすぐのことだった。三年以上前の話だ。

あのとき快諾してくれたのはなぜだろう。当時の彼女なりのやさしさだったのだろうか。そんなふうに前向きに考えてみる。寝室は分けていた。だから彼女の部屋にはいると、そこは真っ暗だったけれど。

「え？ いやいや……。やさしさとかそんなんじゃないよ」

視線でつづきをうながす。りんどうはこめかみをかき、座卓にもたれていた半身をゆっくり起こした。去年短くした髪は少しずつ整えられ、毛先があごのラインに届こうとしている。南国の鳥の羽のような青いメツシユは、とうに消えてなくなっていた。

「あのころは国永から頼まれごとされたら、断らないようにしてたから。たいしたことでもなかったし。……どうしたの？ 何か昔のこと思い出しちゃった？」

青みがかった黒い瞳が、低い位置からのぞき込んでくる。そしていともたやすく俺から答えを引きだした。

「少しだけ」

「そっか。ねえ国永。コーヒーいれてよ。ふたりぶん」

りんどうに手を引かれるまま、夜のキッチンへむかう。まだ眠る時間には早すぎて、そこは真つ暗だった。

点灯されるとみぞおちのあたりがほつとする。まるで子どもみたいだ。パニックを起こすわけではないから、黙っていればそれこそだれにも知られない。根強く残ってはいるものの、その程度の苦手意識ではある。

「こんな時間だけど、せっかくだし歌仙堂の新作出しちやおうかなあ」

りんどうは、炊飯器を乗せている台の下から、小さな紙袋を取りだした。

「今日買ってきたやつかい」

「うん。試食させてもらったんだけど、もうほんと口のなか入れた瞬間ほろほろって崩れちゃってさ。即買っちゃった。フォーチュンクッキーだって。おみくじがついてるの」

「そりゃあ楽しみだな」

コーヒー豆をストックしている戸棚から、俺は浅煎りのものを選んで取りだした。ミルでがりがり挽いていく。

「国永。お湯わかしくね」

「頼む」

「はい」

コーヒー用のやかんに水をそそぐ音。換気扇をつける音。ガスのスイッチがまわされ火がともる音。自分以外のだれかが立てる音はなんとも言えず心地いい。

りんどうがめずらしく鼻歌を歌いだした。ああ、そうだ。アメイジンググレイスだ。豆を挽く音にほとんどかき消されてしまっているが、こういうときでもなければ歌ってくれないだろうとも思う。

飛び飛びに聞こえてくるメロディーに、ふとかすかな違和感をおぼえた。

「あ、雨だ。もしかして雷も？」

りんどうが言うと同時に、そのかすかな違和感が霧散する。雨粒のついた窓ガラスのむこうで、パツと夜空があかるくなった。雷鳴のほうはまだおぼろげだ。

「そう言えば予報が出てたな」

今朝のニュースで全国的に大気の状態が不安定だと言っていた。

あたりにコーヒーの香りがただようころには、雷はだいぶ近づいてきていた。居間にもどり、テレビもつけずに外のようすに耳をすませる。

「げっ。凶だ。旅は道連れ世は情け……？」

「俺は大吉だ。笑う門には福きたる。あはは、取り替えるかい」

「いいですよーだ。もう一個食べるし」

そんな調子でフオーチュンクッキーに舌鼓を打った。そしてコーヒーのひと口目を味わったほとんどその瞬間、ドーンという大きな音とともに家全体がびりびり揺れる。

「え」

「あ」

あかりが消えた。

真っ暗だ。

まっくらやみ、だ――。

○ ○ ○

目がさめた。

外がごうごう言っている。背筋がぞつとして、タオルケットと羽布団を目のぎりぎり下まで引つ張りあげた。眠る前に『これから台風がくるんですよ』とここで働く人が言っていた。もしかするともう、この空の上にいるのかもしれない。ベッドにはいる前にちゃんとつけておいたはずのスタンドランプが消えている。

がたん！

「ひっ」

風がどんどん強くなってきた。大きな窓の外に揺れる木の影が映っている。まるでおいでおいでと手招きしているようだった。ゆらゆら、ゆらゆら。

のどがきゆうつと痛くなった。目をこする。

「ママがあんなふうによんでくれたら、おれ、きつとあいにくのに」

お金のつかいかたはちゃんとパパから習った。学校でも算数の時間にプラスチックのお金でいろんな値段を並べたことがある。

電車にだつてきつとちゃんと乗れる。一度だけママの病院まで電車を乗り継いでいったことがあった。

『いいかい。もしわからないことがあつたら駅員さんに訊けばいい。ちゃんと国永のいきたい場所へいく方法を教えてくれる』

おれはベッドからおりた。

「きがえなくちゃ」

暗くて手もとがよく見えない。やつと上から二つ目までのボタンがはずれた。そのつぎの三つ目のボタンは簡単にはずれたのに、四つ目からがうまくいかない。暗いのが怖くて指がうまく動かない。

電車は何時まで動いているんだろう。あの電車に顔はなかったけれど、早くしないと眠ってしまうかもしれない。

パパは遠くへいったから、もう会えないとおじいさまに言われている。そのおじいさまは『ゴイタイ』を引き取りに海のむこうへいつてしまった。

だからおれはひとりで電車に乗る。ママは呼んでくれないけど、でもすぐ会いたい。会いたいんだ。

「う、え、ひつく、う……う……」

だれもない。ママもパパも、おじいさまもない。

どうしておれだけがここにいるの。

どうして連れてつてくれないの。

どうして迎えにこないの。

ひとりにするの。

どうして。

「国永、おいで」

近くにだれかがしやがみ込んだ。あつたかい手が、そうつとおれの頬を拭う。びっくりして涙が引つ込んだ。

「だ、だれ？」

「さあて。だれでしょう」

（サンプルは以上です）